

## CLC からしだね書店便り

December  
2023

12



## \*今月のご案内\*

- ① 「こどものための神のものがたり」(最終回)
- ② 「いのち」を賭けた文書伝道  
CLC からしだね書店 店長
- ③ おすすめする本のご紹介  
「保育者の祈り—こどものために、こどもとともに」  
日本キリスト教団出版局
- ③ 読書感想本『イエスとブツダ』

CLCからしだね書店では…

- ① キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
- ② お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みに来てくださるだけでもけっこうです。
- ⑤ 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、好きな本を手にとってお読みください。
- ⑥ 古書のコーナーもあります。ほりだしものもあります。
- ⑦ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLCからしだね書店 & カフェ トライアングル  
 営業時間 11:00-17:00  
 日曜日と年末年始(※祝日も営業)  
 定休日 毎月第3木曜日は書店のみ営業



第12回 いじゅうじかとぶっかつ

おまえが神なら十字架から降りてきてみる  
そうしたらしんじてやるよ  
ひとびとは言いました  
けれどイエスさまは降りません  
神さまだから  
ひとびとはイエスさまに  
つばをかけました  
やりきれない毎日はらいせに  
けれどイエスさまは  
つばをめぐぐこともしません  
やりきれなさをうけたるために  
ひとびとはイエスさまを  
血がでるまでたたきました  
人生の苦しみにあえぎながら  
けれどイエスさまは  
よけることもしません  
あえぎをせおうために  
三日後、死人のなかからよみがえった  
イエスさまの  
いのちは世界にあふれている  
やがてすべてがあたらしくなって  
もうなみだはいらない

大頭 眞一 おおず しんいち  
1960年神戸市生まれ。英国マンチェスターのナザレン・セオロジカル・カレッジ(BA、MA)と関西聖書神学校で学ぶ。日本イエス・キリスト教団香登教会伝道師・副牧師を経て、現在、京都府の京都信愛教会と明野キリスト教会の牧師、関西聖書神学校講師、焚き火塾代表。ドリームパーティー発起人。

- 1 イエスの十字架と復活はかぞえきれないできごとをもちました。
- (1) 悪と罪と死の力はほろぼされました。愛する自由が解放なされました。
- (2) ほくたちの罪の処置は終わりました。自分を責めるときはすぎたのです。
- (3) 主イエスの愛の言葉と行いは、私たちの中から湧き出しています。ますます豊かになります。
- (4) 神さまとの平和が訪れました。この和らぎは世界をおおっていきます。
- 2 これらのできごとは、父のあわれみによって、イエスにおいておこり、聖霊によって、ほくたちひとりひとりに実現しています。三位の神が総がかりで、ほくたちを三重に抱きしめています。
- 3 そんなできごとが起こるのは、教会です。キリストのからだで、ほくたちはその一部なのです。

おとなのための 神の物語  
子どもだったみなさんへ



和紙ちぎり絵：森住 ゆき もりずみ ゆき  
群馬県生まれ。和紙ちぎり絵作家。著書に画文集「アメイジング・グレイス」「ぶどうの気持ち」「日めくり片隅の花でも」(いのちのことば社)。「思いを伝える和紙のちぎり絵春夏秋冬」(日貿出版社)がある。埼玉県在住。



『保育者の祈り』

——こどものために、こどもとともに——

望月麻生 監修・著

小林路津子・

新井純 著

日本キリスト教団

出版局

(1200円+税)



このたびおすすめする「保育者の祈り」を読み終えて、一つのエピソードを思い出しました。ある高齢の女性から聞いた話です。

「私がまだ幼かったころ、深夜、母に手をひかれて、海に連れて行かれました。母は、心中するつもりだったようです。得体のしれない恐怖のなかで、私は、幼稚園の園長先生の顔を思い出しました。そして母の手を振りほどいて、「おかあさん、だめだよ、園長先生が悲しむよ」と言ったのです。私たちは海から引き返すことができませんでした。私が通っていた幼稚園の園長先生は宣教師で、毎朝、登園してくることもたち一人ひとりを抱きしめて、「神様はあなたを愛していますよ。私もあなたを愛していますよ」と、語りかけてくださっていたのです。園長先生の抱擁が、私たちのいのち

をつなぎ止めました。」

「保育者の祈り」は、薄い本です。難しいことは書いてありません。だから、1時間あれば、読めます。そして、読んでいると、心がじんわりします。

まだ上手に言葉が出てこないこどもたちにも、大人と同じように、いや、もしかすると大人以上に複雑で繊細な感情があり、気持ちがあり、考えがあるのだなあと、感じることはありません。でも、うまく言葉では言い表せないで、大人は、そんなこどもたちの思いを簡単に無視してしまうことがあるのではないのでしょうか。この本には、そんなこどもの心に寄り添い、かくれた思いを無視せず、ていねいに拾い上げて、より良いものへと導こうとする、保育者の「祈り」の言葉が書かれています。

たとえば、保育園で「夕方遅くまでおうちの人を待っています」という状況では、こどもの心細い気持ちのひだをたどるようにして受け入れ、遅くまで働く親御さんをお願いしたり、みんながあなたのことを気にかけているよと励まし、こどもがこの寂しさと悲しみを乗り越えていけるように導く、そんな祈りが短くわかりやすい言葉になつて、紹介されています。

死んでしまったザリガニや、園庭のあちこちから集められたダンゴムシ、もうすぐ芽を出す球根など、人間以外のいのちのために祈る祈り、災害や戦争の中で生きる見守る人たち、そして政治家にもぜひ読んでいただきたいと思えます。

こどもとともに祈り、こどものために祈り、私自身のために祈る、これらの祈りは、キリスト教保育の歴史の中で脈々と受け継がれてきた保育者のスピリチュアルな祈りでもあると思います。毎朝、登園してきたこどもを抱きしめた園長先生の祈りも含めて、この本に至ったのかなあという気がします。そしてその精神は、キリスト教の園だけでなく、広く保育をする人の願いとして、こどもたちの成長を支えているのではないのでしょうか。そういう意味では、クリスチャンだけでなく、こどものことを大切に思ふ、すべての人に読んでいただきたい本です。最後に、この本には、祈りとは何か？が、ちゃんと書いてあり、たいへん共感しました。

「それにしても、なんとという時代でしょう。AI（人工知能）に気軽に命じれば、AIは実に立派そうなお祈りの文章を、いとも簡単に作成してくれるのです。だからこそ、この本を開いてくださったあなたにお願いします。祈りの言葉は、「自分の心で紡いでください。自分の気持ちをこぼすことで表せないもどかしさ、きれいな祈りになごうできない泥臭い毎日、喜怒哀楽で単純に整理できない複雑な思い、それらこそが、あなたにしか折れない、あなただけの祈りなのです。」(p.94「おわりに」より)

人たちのことを思いやる祈りなど、こどものやわらかなこころに備えられた、他者への愛を育む祈りもあります。また、保育者自身が、自分のために祈る祈りも、平易な言葉で紹介されています。保育者もまた、ひとりの人であり、仕事上の人間関係や能力の限界の中で、弱く、迷いやしく、疲れてしまう存在であること、ケアされる必要があることを、具体的な祈りの言葉を通して、知ることができます。この祈りは、すべての働く人の祈りに通じるものがあります。

短いお祈りの一つ一つを読むと、人としての歩み始めたばかりの小さなこどもたちを守り、その心と体の成長をたすけるお仕事が、いかに尊く、大切な働きであるかがわかります。こどもは、関わった大人たちから、自分の存在の価値を知り、生きるためには他者の支えが必要で、自分と同じように他の人も大切な存在だということを知るからです。それは、こどもが大人になってからずっと、その人の生を支え続けます。だから、保育に携わる人たちが、この重要な働きにこころおきなく集中できるように、給与や待遇面でも苦勞をかけることがないような社会全体のシステム作りが必要だと、あらためて思いました。

「保育者の祈り」は、職業としての保育者だけの祈りではありません。こどもを育てる親御さん、祖父母、おじさんおばさんなどの親せきのみならず、地域でこどもを



Series [連載]

読者のひろば

「信教の自由を覚える日」に国のために祈る?

来年2月12日、全国の教会が「信教の自由を覚える日」としてさまざまな集会を計画する中、日本国家祈祷会、福音宣教協力が主催する若者対象の祈祷会「Awake」(事務局・日本オープンバイブル神戸キリスト栄光教会)が大阪女学院を会場に催されるという。チラシには「主の教会よ、日本のために折れ!」との勇ましいコピーが掲げられ、メッセンジャーとして日本維新の会の金子道仁議員とhi-ba代表の川口竜太郎氏も登壇する。金子議員は「隣人愛を国政へ」と掲げて当選し、「福音派」を中心に教会関係者からも幅広く支持を得てきた。折も折、北朝鮮から発射された人工衛星搭載のロケットにメディア

を挙げて右往左往する様を見せつけられた翌日だっただけに、この衝撃は小さくなかった。告知を投稿した関係者のSNSには、「80年前には多くの若者たちが日本のため天皇陛下のために命を捨てました。21世紀にはキリストのために使徒トマスの様に「我々も主のためにいのちを捨てようではないか!」と叫んで参りましょう!」「主のために、生涯を捧げる献身の招き、そして、主のために政治家を志したい人、企業を立ち上げた人の招きもあります」などと書き込まれている。戦争が遠い対岸の火事ではなく、いかなる理由があれ戦中と同じ文脈でキリスト者が自己犠牲を美化すべきではない。かつての過ちに学ばず、またも愛国心を盾に若者を戦場へ送り出すつもりか。

(東京都 プロテスタント信徒 日坂倫也)

「いのち」を賭けた文書伝道

坂岡 恵 CLC からしだね書店 → 次号は沖縄キリスト教書店



か

らしだね書店を開店した約3年前、同時にCLCインターナショナルという国際的な文書伝道の組織にも加入することになりました。その契約時の条件に、「この使命のために殺されることも厭わない」という一文があり、私たちはかなり衝撃を受けました。現代の日本で、工作上、さまざまな契約をしてハンコを押しますが、当然ながら命を賭すような契約をしたことは、今まで一度もありません。ですから最初、そんなことを問うてくること自体、熱狂的、感情的な気がして違和感がありました。ですが、書店を引き継いでからわずか3年の間に、日本でも「新たな

戦前」という言葉を聞くようになりました。日々更新されるウクライナやガザでの戦禍の報道、どんどん殺されていくいのちの数……。何もできずにいる情けない私の近くにもまた、「殺されることも厭わない」時代が、迫ってきているのではないかという気がしてなりません。1941年にイングランドで始まったCLCは、世界が大

きな戦争に突入する中で、まさに「命がけで」という言葉がふさわしい時代をくり抜けてきました。加入国のリストには、自由がなく人権が抑圧されている国もあり、私が感じた違和感自体が、そんな国で文書伝道を担う彼らからすると、平和ボケも甚だしいということになるのかもしれませんが。文書伝道を担う覚悟を、この時代



来日したCLCアジア地区代表のマシナスさん夫妻

に「命をかけて」問われた時に、私は私が「伝道」したい「福音の本質」をちゃんと捉えているだろうか、考え込んでしまいます。住む家があり、おいしいものを食べ、仕事があり、余暇を楽しむ……という暮らしが許されている私は、その暮らしのありがたさを噛みしめながら、ガザで死んでいく子どもたちの境遇の差をどう捉えればよいのかジレンマを感じます。私の「いのち」をかけてでも伝えなければならない福音と、ガザの子どもたちの「いのち」は、ちゃんとつながっているか? 立ち止まらずに考え続けたいと思います。(さかおか・めぐみ)

「読者のひろば」の投稿者のおっしゃっていることに私はたいへん共感します。投稿者が危惧しておられるように、日本国家祈祷会の関係者の方でしょうか、SNSで「戦中と同じ文脈で」「天皇と神を同列に置いて」「天皇陛下のためにいのちを捨てた80年前の若者」を持ち出したうえで、「主のためにいのちを捨てよう」と呼びかけておられることに、私はとても不安を感じます。子どもの頃、私の教会には、信仰ゆえに投獄された経験を持つ

キリスト新聞に「縦断・列島書店員日記」というコーナーがあり、全国のキリスト教書店が持ち回りで「日記」を書いていきます。12月1日号は、CLCからしだね書店の順番だったので、「書店員日記」の上に掲載されている「読者のひろば」を読んで、言葉が失いました。「読者のひろば」の投稿者のおっしゃっていることに私はたいへん共感します。投稿者が危惧しておられるように、日本国家祈祷会の関係者の方でしょうか、SNSで「戦中と同じ文脈で」「天皇と神を同列に置いて」「天皇陛下のためにいのちを捨てた80年前の若者」を持ち出したうえで、「主のためにいのちを捨てよう」と呼びかけておられることに、私はとても不安を感じます。子どもの頃、私の教会には、信仰ゆえに投獄された経験を持つ

【店長】





# 『イエスとブツダ』

(ティク・ナット・ハン)

春秋社

2,200円〔本体2,000円＋税〕



本書はベトナム人の禅僧ティク・ナット・ハンがフランスで立ち上げた「プラムヴィレッジ」という仏教コミュニティで行ったクリスマス講話をまとめたものです。ティク・ナット・ハンは平和活動家であり、詩人であり、最近よく耳にする「マインドフルネス」を普及させた宗教者でもありました。16歳で出家した著者は、ベトナム戦争が起こると「行動する仏教」という理念のもと停戦を訴え、被害者救済活動を行いました。1966年にアメリカに渡ると、戦争の終結を働きかける活動を展開しました。そこで著者はマーティン・ルーサー・キング牧師と出会い、キング牧師のベトナム戦争反対運動にも影響を与えました。こうした活動の結果、北ベトナムも南ベトナムも著者の帰国を拒否したため、30年もの亡命生活を送るようになりました。

本書を読むと、対立を平和へと導いた著者の活動の数々が、僧としての彼自身の宗教的洞察に基づいていたことが解ります。イエスとブツダから学び、様々な対立を乗り越えて人々が助け合う世界を夢見た著者のメッセージから考えたことを、皆さんと共にしたいと思います。

まず著者が強調するのは、「インタービーイング」(すべてのものは単独で存在しているのではなく、互いに影響し合い、支え合っ

ているように。「インタービーイング」とは、こうした世界のありようを表した言葉です。

このような認識に立つてものごとを深く観察してみると、今までとは違った世界の見え方が開けてきます。例えば一つのパンを食べるときにも、それを作った人、その材料である小麦、小麦を育てた人、それをほぐんだ土地や太陽といったものにまで、想像が及んでいくでしょう。著者は言います。

一切のパンのなかに太陽の光があります。パンのなかに太陽を見るのは、むずかしいことはありません。太陽の光がなければそのパンはここに存在することができません。(8頁)

こうして見ると、例えば、普段は全く個人的な営みであると思っ

ている消費活動への見方も変わります。一切のパンを作る過程で、人・動物・自然が何らかの形で傷つけられたり、搾取されていないか。そういうことを想像すると、「安さ」や「便利さ」とは別の基準でものを買うようになるかもしれません。このように、「インタービーイング」という視点から世界を見なおすと、想像力が働き、人・動物・自然への慈悲や愛の心が生じるのです。



というシンプルな言葉で表現しています。あるものありようは、別のものありように依っている、ということ。このことについて、著者は波の比喻を使って次のように説明します。

さて、波打つ海を想像してみてください。大海原の波はたくさん波にとり囲まれています。波が自分を深く見つめたら、他のすべての波があるから自分がそこにいる、とわかります。波が寄せたり引いたり、うねったり漣になったりするのは、まわりの波たちがそうなっているからです。波が自分を深く見つめてみたら、波は波全体、すべてのものに触れることができるのです。波はまわりの条件に支えられて、そこにあります。(7頁)

すべてのものは単独では存在できません。人間の場合を考えても、家族、友人、言語、文化、生まれ育った環境、時代などがゆるゆるの影響で、今のその人のありようがまわっていることが分るでしょう。つまり、その人をこのようにあらしめるあらゆるものや人が、影響としてその人の中にあり、反対に、その人の影響によって存在しているあらゆるものや人の中には、その人が影響としてあるのです。ちょうど個々の波が他の波の影響のもとに存在し、個々の波もまた、周りの波のパターンに影響を与えて

ネス」とは、そのことを表現した言葉にほかなりません。

仏教では、愛の基盤は理解です。あなたがマインドフルになつたら、他の人の苦しみが見えてきます。苦しみが見えると、突然、その人の苦しみを減らしてあげたくなくなります。(中略)あなたが敵と思っている人が苦しんでいて、その苦しみをとめてあげたいと思った瞬間に、その人は敵ではなくなるのです。(35頁)

ブツダが悟られた真実は、苦しみが存在するということです。もしもあなたが自分や他者のなかにある苦しみに深く触れたら、理解が生まれます。理解が生まれたら、愛と寛容が生まれて、苦しみをかわらせるのです。(38頁)

これはまさにイエスが他者とのかわりにおいて実践したことではないでしょうか。イエスは、人々の苦しみを深く見つめ、理解し、寄り添い、癒しました。そのときイエスは、宗教的慣習や差別意識から全く自由に、目の前にいる具体的な人の苦しみと向き合っていました。イエスの愛はそこから始まっています。

またイエスは、神への祭壇に供え物を捧げる前に、まず隣人と仲直りをするように教えました(マタイ5章23-24節)。神との関係を語る前に、まず私たちのそばにいる具体的な一人の人を和解し、その人と平和な関係を築くことが大事なのです。神への供え物は、「ほうって置いて」(岩波版)、まず兄弟と仲直りをし、「そ



してそののちやって来て」捧げればよいのですから。次に掲げるのは、こうしたイエスの言動から学んだ禅僧である著者が、ブツダの教えについて、イエスについて、そしてクリスマスについて語った講話のなかのことばです。

いまから二千年くらい前に生まれた人がいます。みすからのなかにも社会のなかにも苦しみがあることを知りましたが、その人は苦しみから逃げようとはしませんでした。目を外にむけて苦しみの本質や原因を深く探ってみました。そして、勇気をもってその苦しみを人々に伝えたので、その人は世代を超えて人々の師となりました

た。クリスマスを祝う最高の方法は、マインドフルに歩き、マインドフルに坐り、物事を深く見つめることです。苦しみがまだここ、私たちがひとりひとりのなかにあること、世界中にあることに気づくことです。(38頁)

著者の祭壇には、釈迦だけでなく、イエスの肖像も飾ってあったそうです。一切れのパンの中に太陽を見、最も小さい者の中にイエスを見る。苦しみに思いをはせ、想像力を働かせ、慈悲と愛の心を持てるよう願う。クリスマスとは、本来そのような過さすべき時なのかもしれません。

【書店員 凱】

## 「子どものための神のものがたり」 おとをのたのみの 神の物語

「子どものための神のものがたり」の連載が、今回12月号で終了しました。

森住さんは、1年間を通して、子どものための絵を12枚、大人のための絵を12枚、創ってくださったのですが、最後の十字架の絵（今月号の子どものための絵）だけは、2枚送られてきました。「どちらを載せるかは、おまかせします」と。どちらがいいかなあと、悩みました。どちらの絵にも、捨てがたい味わいがありました。あれこれ並べているうちに、たまたま11月号に掲載した赤ちゃんイエスの絵と、薄紫色の寂しい夕暮れの十字架が並んでしまいました。そうしたら、なんだかじーンとききました。それで、森住さんのお許しを得て、「子どものための神のものがたり」の最終回番外編として、再度、赤ちゃんイエスのクリスマスの絵、それから薄紫の十字架の絵、2枚を並べて載せることにしました。

イエスさまは弱く小さな赤ちゃんとして生まれ、捨てられて十字架につけられました。美しい星空の下の小さなお誕生のものがたりと、さびしいさびしい十字架のものがたり。2枚の絵と絵を結ぶイエスさまの33年間のものがたりは、わずかな聖書の記述から推しはかるしかありません。そこからどんなものがたりを想像するかは、私自身のもものがたりとつながっているような気がしてなりません。

この一年、きれいな絵とあたたかな文章で、書店だよりを飾ってくださった、森住ゆきさん、大頭真一牧師、ありがとうございました。

CLCからしだね書店 店長 坂岡 恵





# 古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただくとありがたいです。(受付できないものもありますので事前にお知らせください。ご事情により当店より回収に行かせていただくこともあります。ご相談ください)

## 【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本 (多少、書き込み等があっても、大丈夫です)
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし (料理、健康、経済等) にかかわる本
- 5 小説 (人の暮らし、尊敬、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画 (人の暮らし、尊敬、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

百科事典・辞書・開封済みの  
CD・DVD・月刊誌・週刊誌等は  
受け付けておりません

## 【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館  
宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX：075-574-0025  
Mail：clc@karashidane.or.jp

## 【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

## 【献本感謝】

若井虔様、里村佳子様、竿代皓子様、石渡高様、西尾朱實子様、青田恵子様、中谷博幸様、粕谷たか子様 (順不同)

11月の古書の収益は68,920円でした。【古本の売上を含むCLCからしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思います。匿名ご希望の方は、お知らせください。  
ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございます。

## 編集後記

■書店よりは、前回に引き続き、仏教の教えを取り上げました。自分がどの宗教を信仰しているにしても、他の宗教を信仰する人の気持ちを理解し対話することの重要性を、今、この時代、この世界の一員として生きる一人として痛感します。そういう意味から、その対話のベースとなる「哲学」という「共通語」を持つことは、大事なことだと思います。■今年のクリスマスは、コロナ禍の自粛も緩和されて、クリスマスの催しを再開した教会も多かったようです。イエス様のご降誕を、ともに喜ぶあえることを、感謝します。今年も一年、お付き合いいただき、ありがとうございます。【店長】

お知らせ

★2024年1月号からは、新しく「子どもと大人のためのこころの対話—信仰と哲学」の連載が始まります。執筆者は、坂岡大路さん (臨床心理士・公認心理師・『本質学研究』『哲学プラクティス学会』『キリスト教教育学会』などの学会誌に哲学実践に関する論文を掲載。子ども哲学カフェ、若者哲学カフェ主宰) です。

12/26 (火)～28 (木)

書店のみ営業 (カフェは休業)

12/29 (金)～<sup>2024</sup>1/3 (水)

冬季休業

<sup>2024</sup>1/4 (木)

書店のみ営業 (カフェは休業)

1/5 (金) カフェ・書店ともに通常営業

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね  
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス  
からしだね書店&カフェ・トライアングル  
〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館  
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025  
書店メール clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店便りの  
バックナンバーはこちらから

